

研究科長式辞 2008年3月25日 学位授与式

みなさんは早稲田大学大学院情報生産システム研究科の修士課程をこのたび修了されることになりました。今回が3月修了の第4回目の修了式です。修了生は全部で93名、そのうち留学生が46名います。

みなさん方が入学された時のことを今でもはっきり覚えています。

それはみなさんの目がキラキラと輝いていた事です。情報生産システム研究科には学部がありませんので、国内では北は北海道から南は沖縄まで、広く全国から、又、海外に関しては中国、韓国、台湾等のアジアの各地からこの地に集まってこられた訳ですが、やはり早稲田大学できちんとした教育を受け、素晴らしい研究をしたいという希望に満ち溢れていたからだと思います。

みなさんの2年間の大学院生活はいかがだったでしょうか。高度な専門知識を修得できたでしょうか、又、今後の社会生活の中で大変重要となってくる未開拓の分野に挑戦していく力を身につけていただけたでしょうか。あるいは、みずから新しいものをクリエートする喜びを経験していただけたでしょうか。

みなさんは早稲田大学大学院情報生産システム研究科での学生生活を通して、このような力を体得していただけたものと信じております。

さて、今回の修了生の中には、博士課程に進学する人達が7名おられますが、これらの方には、ぜひ世界に発進できるような研究を行っていただきたいと思っております。

長い科学技術の歴史を振り返ってみますと、多くの科学の基本原則、あるいは技術が欧米の研究者によってなされてきたのを否定する事は出来ないと思います。

例えば、古くはマクウェルの電磁方程式はマクウェルが提案しましたし、最近の半導体の基本技術も Texas Instrument のギルビー等により開発されたものです。

今後、日本をはじめとするアジアの国々が global な大競争時代に競い合っていくためには、他の場所で研究された技術をブラッシュアップして価格性能比の高い製品をつくっていただくだけでなく、苦しくても、みずから新しい技術を創造していく事が強く求められています。ぜひこのようなことを念頭において新しい技術の創造に努力してほしいと思います。

次に実社会に出て行かれるみなさんにいくつかのコメントをさせていただきたいと思えます。

まずはじめに、学校と実社会は基本的に異なるということです。それでも、20~30年前の日本の場合、特に大企業の研究所の場合には、大学と似たような雰囲気がありました。入社してきた新人には社会人のイロハを組織的に学ばせる場もありましたし、また、オンザジョブを通して文章の書き方や研究の進め方をきめ細かく指導する先輩達が多数いました。なにより、入社したての若手に「何を研究開発するのか自分で考えなさい」といった指導を行う余裕がありました。

しかし、最近の企業は様子のがらっと変わってきています。大学で修得した技術や研究開発を推進していく力に対して給料を支払うというスタンスになり、先輩達からの手取り足取りのきめ細かな指導も期待できなくなってきています。そういう意味で、この大学院で学ん

だことを十二分に発揮して頑張してほしいと思います。

次に、留学生のみなさんをお願いしたいのですが、ぜひみなさんの母国と日本の架け橋になってほしいという事です。この2年間でみなさんは日本の国がどのような国であるか、あるいは日本人がどのような国民であるかという事を学ばれたことと思います。

日本がみなさんにとって良い国であったことを期待していますが、場合によっては、必ずしも良い印象ばかりではなかったのではないかと少し心配しています。

しかし、悪かった点をご容赦いただいて、ぜひ良かった点を母国と日本との関係構築に生かしてほしいと思います。

一年程前に、ニュースキャスターの田原総一郎さんと元外交官の岡本行夫さんが上海のTVキャスターの司会で中国の有識者と日本と中国の過去、現在、未来について討論している中国のテレビ番組を見ました。

この放送は中国で4億の人達が見たといわれています。番組を見た中国の若者の中には、はじめて日本の本当の姿を知ることができた、中国と日本は今後未来指向でお互いに努力していく必要があるとのコメントをしていました。

日本で少なくとも2年間生活したみなさんは、母国と日本との架け橋に一番近い存在です。ぜひ、母国と日本との友好関係に努力していただきたいと思います。

以上、2、3コメントをさせていただきましたが、みなさんが素晴らしい未来を築かれていく事を期待して挨拶にかえさせていただきます。